

宇宙
開発

公的研究機関

宇宙からのメッセージを聞きたくて

三浦聡子 ((独)宇宙航空研究開発機構 主任開発員 宇宙利用ミッション本部ミッション運用システム推進室)

仕事の内容とやりがいについて

私の主な仕事は、大きく2つに分かれています。一つは宇宙から地球を観測する「地球観測衛星」のミッション運用(衛星がどのように観測をしていくのかを決定する「観測計画作成」、衛星から取得したデータをプロダクトに変換するための「データ受信・記録・処理」等)を実施するための「実運用」設備の開発・維持・運用です。もう一方は、「実運用」設備に将来的には使えるかもしれない「新規技術」の調査・実証になります。前者に関しては、5月に軌道上運用が停止した「だいち」という衛星等を担当しています。衛星打上後に観測データが初めて「画像」になったときの達成感はまさに格別です。担当した設備の成果利用拡大を新聞・ニュース等を通じて実感できるのは、この仕事の醍醐味です。後者については「技術実証」という位置づけであることの利点として、ある程度まで自分の裁量で、各年度の実施計画(対象技術の特定、調査方法、実証方法、等)をたてての作業を実施しています。両者、ある意味での両極端ではありますが、双方とも非常にやりがいのある仕事です。

仕事と生活のバランス

週末の2日間を家事でびっしり埋めてしまうと月曜日に疲れ果ててしまうので、2日間のうちの1日で家事をある程度まとめてやって、もう1日は、なるべくゆっくりするようにしています。仕事をしながら、完璧に家事をこなす、というのは無理(少なくとも私にとって)なので、そこは早くに自分なりの「手抜き術」を見つけるのがうまく両立させるコツだと思います。学生のときに趣味で弾いていたピアノも数年前からもう一度始めました。趣味の時間を30分でも持てると非常に充実した気分になることができますし、いい気分転換になります。

私の進路決定のきっかけ

小学校での「豆電球実験」の楽しい思い出が「電気」というもの、ひいては理科への興味の最初のきっかけとなりました。さらにSF小説等で読んだ「宇宙開発」への憧れ、ニュースで見た「NASA」への憧れ、といったものが加わり、「電気を勉強して、日本(地上)にいながら宇宙開発に携わることができる仕事につきたい」とより具体的なイメージができてきました。そんな中で聞いた「日本人宇宙飛行士初募集」のニュース。これがほぼ決定打となり「宇宙開発事業団(現在の宇宙航空研究開発機構)で働きたい」と決心したのは高校生のときでした。

進路選択についてのメッセージ

私の場合は「やりたいこと」が、幸いにしてかなり早い時点で見つかりましたが、それに成績が追いつかず、「文系に転向しようか」と悩んだこともありました。それでもやはり「宇宙開発」があきらめきれずにこだわり続けた結果、今の仕事にたどりつけました。やりたいことを見つけたならば、それにこだわっていくこともいいのではないかと思います。ただし、それ以外の全てを切り捨てるのはお勧めしません。海外の方とのコミュニケーションには、外国語、相手国の文化・歴史は勿論ですが、日本の文化・歴史といった知識も非常に有効です。

海外留学・勤務を通じて得たこと・得したこと

私の場合は「転勤」や「留学」ではなく、自分の所属機関(当時はNASDA、今のJAXA)とNASA間の連絡要員(リエゾン)として、「11ヶ月の長期出張」という形での米国NASA勤務でした。短期間ではありましたが、英語力、特に相手とコミュニケーションをとるために必要な能力(聞き取り、説明等)については、間違いなく向上しました。又、連絡要員という立場上、現地機関の上司がいるわけでもない「自分が動かなければ何も動かない」環境でしたので、「自分の仕事は自分で考える(他人の指示を待つのではない)」姿勢も身についたのではないかと思います。帰国後は、担当業務の分野がさらに広がり、さらにいろいろな経験を積めるチャンスももらっています。

海外の女性研究者の活躍と位置づけについて感じたこと

海外勤務中だけではなく、帰国後の海外機関との会議の際にも、出席者の女性の比率の差は感じます。相手機関の半分は女性であるのに、こちらの女性は私のみとか、そもそも相手機関の責任者(課長級、部長級、さらにその上)が女性ということが多々あります(私の所属機関では、課長級までの女性しかいません)。ただし、私自身は、自分の機関で「女性であるがゆえの不公平な待遇」等は経験したことがないので、今後は日本でも(徐々にかもしれませんが)海外機関なみにしていきたいのではないかと期待しています。

海外留学・勤務を決めたきっかけについて

前任のリエゾンの帰国時期が迫っていた年の忘年会で、当時の上司が「誰か後任で行きたい人は?」と言っていたため、一度は海外での勤務を経験したかったという、ただ、それだけの理由で「行ってみたい」と手をあげたのがきっかけでした(まさか上司が本気で後任を探しているとは思わずに)。翌朝、上司から「本当に行く気があるのか」と聞かれて、「行きたい」と答えたところ、とんとん拍子に話が進みだしました。非常に運がよかった、ということもありますが、「行きたい」という意思表示(もちろん、海外勤務をするためのある程度の英語力の準備はいわずもがなですが)はきちんとすべきものなのだとということもつくづく感じました。

滞在先の思い出・生活者としての体験

パスポートには現地での滞在先住所が記載されていないため日常生活上の身分証明書としては認められず、自動車の運転免許が必須でした。ところが、運転免許を取得するには「住所を証明する書類(公共料金請求の郵便物等)を3種類以上持ってくるように」といわれ、電気・ガス・水道の請求書が郵便で届く日を心待ちにしていたのを今でも覚えています。「請求書」と名のつくものを「心待ち」にしたのは、(これまでのところ)後にも先にもあのみです。

<三浦聡子(みうらさとこ)プロフィール>

宇宙航空研究開発機構
宇宙利用ミッション本部ミッション運用システム推進室所属 主任開発員
埼玉県立浦和第一女子高校から京都大学工学部へ進学。京都大学大学院工学研究科(修士課程)にて電子工学を専攻。
1996年に宇宙開発事業団(現、宇宙航空研究開発機構)へ就職。以降、一貫して地球観測衛星用ミッション運用設備開発及び国際利用推進業務に従事。
2000年に結婚したが、互いの職場が離れていたため週末のみ同居という状態が2004年冬まで続いた。その後、2006年から1年半ほど、再び単身赴任となり、2008年から同居再開。

国際会議の展示会場にて

